

山とスキー



第九號

大正拾六年七月三日第三種郵便物認可大正拾一年四月十四日印刷十一月十五日發行

スキー及び附屬用具



小樽區稻穂町大通

梅屋運動具店

電話八九六番 振替小樽七〇番

大正十年六月七日第三種郵便物認可
大正十年十一月十四日印刷
大正十年十一月十五日發行

(每月一回
十五日發行)

山とスキー 第九號

【定價金參拾錢】

スキー旅行家に

本州方面のスキー家にして本シーズン、北海道方面にスキー滑走をなさんせらるる人にして目的地事情の不明な點がありましたら本會へ御照會下さい。喜んで旅程調査其他の北海道スキー旅行に必要な事項に就て出来るだけ御便宜を計ります。勿論手数料など頂きません。但し御照會はなるべく十二月十五日迄に御願致します。

本誌定價の改正

本誌より定價を改正することに致しました御承知の通り此は營利的の刊行物ではありませんから、値上により敢て不當な利潤を生まうとするのではないのであります。此の事業の將來を安固にして、もつこ氣持のいゝ立派なものに仕様するのであります。また今後は毎月一回十五に發行することに改めました。

本會事務所の移轉

適當な家屋を探索中のところ、今度愈々左の處へ引越しました。従前通り毎週水曜日の晩を定例集會日と致します。
札幌區北三條西七丁目(道廳巡查教習所前)
山とスキーの會

おねがひ

本誌を購入して下さる全土の人々へ
再三書きました様に本誌は營利的のものではありません。また残念乍ら本誌刊行の爲に専心する者がなく、皆本務の片手間にやつてゐるのであります。ですから本誌は一切、前金か又は現金でなければ御渡じしない事に致してゐます。此の事は今回から斷然實行致しますから、御購讀下さる方は此の點、惡しからず御了承下さい。

前金御拂込の人々へ

突然本誌より定價を改正することになりました既に前金を以て御拂込済の方々には本誌に限り舊定價通りの勘定を致します。即ち創刊の際、六ヶ月分(一圓廿錢)御拂込下さつた方は本誌で終りとなります。又六ヶ月分以上御拂込の方には、勝手ながら十號よりは、新規定價通り誌代を頂き度いと思ひます。従つて御申込通りの月まで御送り出来ない事になります。此の點につき疑義、異義がございましたら直接申出下さる事をお願ひ致します。

原稿を與へて下さる人々へ

行を更める時は必ず一字下げること。、を明かに記し一字劃として下さい。申すまでもなく文字は明かに、特に近似の字劃を持つ字に御注意下さい。原稿紙は御申越次第御送り致します。



テレマーク

中野誠

一 テレマーク

Telemarkwing (Telemarkschwung) を一般にはテレマーク云つて居る。然しテレマークと云はれる物は此のスウィング今一つ Telemark-position (Telemarksitzen) 即ちテレマーク姿勢なるもの云である。テレマーク制動 (Telemark-stemming; Telemarkstemmführen) に就ては最後に述べる。「テレマーク滑走」「テレマーク廻轉」であるが、普通テレマーク云ふのは後者の略稱に用ひられて居る。此稿に於て特にテレマーク姿勢と記せざる限りは私も又テレマークをテレマークスウィングの謂とする。

多く云ふ所によればテレマークは優美であつて、クリスチアニアは豪壯である。後者の男性的であるに反して前者は女性的であるとして居る。其の外観に於ては或は然らんかも知れないが實際の力の這入り方や努力の大きさ等は時に反對の様な事もある。私は或人から「獨乙語は入り難くして學び易く、英語は入り易くして學び難い。」云ふ言を聞いた。クリスチアニアを獨乙語に比すならテレマークは正に英語に正敵すると思ふ。私の知つて居る範圍では初めてスウィングを練習する人は大抵、テレマークの方がクリスチアニアより早くものになりかける様に見えるが或る時間を経た後は、テレマークよりクリスチアニアの方が安定になつて来る。入り易く學び難いのはテレマークである。

テレマークはスケートのインカーブ、クリスタニアはスケートのアウトカーブであると云ふ人もある。クリスタニアのアウトカーブは一寸疑問である。何となれば後退脚に体を多く委ねるクリスタニアはアウトカーブと云ひ難い。然しテレマークとインカーブは實に似て居る點を多く有して居る。

諸國のテレマークの一小兒が杖に依る事なしに豪快な滑走をした後くるりし傾斜面で廻轉して止つたと云ふ例の話から考へれば此土地の名から來た名稱らしい。然も諸國では何でもスウィングは皆「テレマーク」云つて居る相である。此が中歐でクリスタニアなる一名を用ひてスウィングを分類したものらしい。

「兩スキーを平行に保ち、一脚は他脚より遙に前出させ、兩膝を直角近くに迄屈曲せしめて滑走するをテレマーク姿勢滑走と云ひ、此姿勢を保ちつゝスキーの横滑りを利用して、後退脚の側に廻轉するをテレマーク廻轉と云ふ」今の所ではテレマークと稱されるものは上述の範圍を脱してはならない。淺くて狭い私の経験二三の書物から得た知識によつてテレマークの研究を進めて見やう。

二 テレマーク姿勢

順序として此點から説き進めて行く、本來はテレマーク

スウィングが在つて後テレマークポジションが獨立したものと云ふが、テレマークスウィングの練習には此の姿勢を出来るだけ完成させて置かないと面白くない結果を來すから此に就て先づ研究したい。

テレマークポジションとしての研究は、直滑降やスウィング乃至ジャムブ程組織的に研究されて居ない。それは多くの場合此の姿勢のまま長い距離を滑らないし又永くは滑り得られないからである。然しテレマークスウィングの大きい前提である事は忘れてはならない。

兩足の距離を六十糎乃至一米位に開いて、前脚の膝を直角前後に屈けて腰を落す。後脚の膝は自然に又直角位に屈り後足の踵は浮き上つて来る。そして後膝はスキーの上十種位の位置に來る。上体はスキーに直角か、やゝそれより前方に傾けて保持し、腰と膝を充分自由に保つてしかも兩スキーを接着せしめて滑る。此がテレマーク姿勢である。此場合前脚の膝より下部がスキー前半部との爲す角は直角又はそれ以内であらねばならない。此が鈍角の時は姿勢として良好とは云へない。

此姿勢に於て最も問題とする所はスキーの前後距離と上体の姿勢此に伴ふ体重の分配である。

上体を滑走斜面と直角に保てば殆ど体重は等分に兩脚にかゝつて来る。此より上体を後に立てれば後脚に、前に倒せば前脚により多くの体重を委ねる事となる。練習者は此

等の全ての場合殊に体重を等分に委ねる事から全部を前脚に委ねる事まで學ばねばならない。全部と云つても少くも体重をぬいた方には其の脚の重量はかゝるものである。テレマークポジションは元來決して樂な姿勢ではない。此は体全体を不自然な形に保つ故である。然し其内で最も樂であるのは体重を均等に左右の足に委ねた時である。此點より見れば只テレマークポジションとしては均等に体重を分配するが可い。然し、多くの場合のテレマークスウィングは前脚により多くの体重を委ねる事を要するが故に、又スタイリツシユな事も、体重をより多く前脚に委ねる方が良い様である。

次は前後の足の距離の問題である。此も只前後の安定度と云ふ點から論ずれば其の距離を大にする程有利であるが此も又多少考へる可きである。或程度以上の距離は大變氣持の悪い姿勢になる。極度にせまいのは明に不正である。適度は最初示した範圍である。然し自己の経験が讀者に對し良い暗示となるなら、次の方法を提供する。實際に於てテレマークポジションに就て問はれた時私は常に此方法を説いて居る。

即ち、全体重を前出させんとする脚に委ねて、普通の直滑降の姿勢を取る。後退させんとする方の脚の關節は大腿部のそれを除く外は全く力を脱いて、次第に前出させる方の脚の膝と腰とを曲けて体を落して来る。後退脚の腰は大

体前と同じ姿勢に保つ時は自然後退脚と足首の關節は曲つて、踵は次第に浮き上つて来る。後脚の膝が地に接したなら次に足首の姿勢のみを變へずに後足を後に引けば膝は次第に浮いて来る。そして地上十種に到つたら其まゝ靜止する。此時は後脚膝は前脚踵の位置邊に來る様になる。初は此を一通、平地で靜止のまま練習するがよい。

此の姿勢は一見すればあまりに兩脚の前後距離がまつた様に見える。然し此は最も樂な姿勢であつて然もテレマーク本來のスウィングに對しても最も良好の準備姿勢であるに信するのである。此點は順を追つて説き進めて行く。

兩膝は互に内側に壓迫させる事。殊に後脚の膝に於て然りであるが、カウルフィールド氏が特に力強く説いて居る通り全く此姿勢で滑走痕を整然たらしめる事は難事である姿勢を保つ上に努力を多く要し、腿又は膝を接着さす云ふ一つの必要な標準を失つて居る爲である。

又同氏は傾斜の不整な地に於ては殊に有効であると説いて居る。成程理論に於ては前後安定は良いが、何分此で長距離を走るには大變な練習と努力を必要とするから、矢張實用なものでない。何處迄もテレマークスウィングの準備運動である。

最後に其何れの足を前出させる可きかである。等高線に直角に滑る場合、左右等しく前出後退せしめて練習する必要がある。然し、斜滑降の時は先づ谷脚を前出させて練習

するが良い。アップヒルスウングの練習に對する準備である。

三 アップヒルテレマーク

カウルフィールド氏は、スウイングを Uphill の Down の二つに手練よく分類して呉れた。日本では山廻り谷廻り一般に云馴されて居る。山廻りは斜滑降の場合山の方へスウイングし初めるのであり、谷廻りとは谷側へスウイングし初めるのである。

説明の便宜上、左廻り、即右前姿勢で行ふものとす。山は左に在る。説明の最も巧妙なのは矢張りカウルフィールド氏である。氏は

「前スキーが後スキーと多少の角を成しつゝ右膝と右足とを少々内側にまわせ、同時に右足スキーの内稜を立てた右踵を下におし下け、右足指を上げる様にしながら其の踵に全体重をかける可し。

直ぐ山向きの廻轉をおこすであらふ。廻轉し出せば直にさらに前方に傾け。運動が止れば前足の指に体重をかけ、後膝を内側に押し、そしてスキーを平行にせよ。」説明としては此で完全である。殊に人を賞める事の好きなアーノルド、ラン氏の讚美して居る如く「足指を上げる様に試みる」は全く巧妙な説明であり暗示である。然し、

完全にスウイングして静止した時は見事にスキーは併列して止るものである。テレマークは唯廻る事丈は外存何の苦もなく出来る。問題は廻り出してから完全に終を全ふするか否かである

失敗に陥つた時の主なものは次の七種である。

- 一、途中で全然姿勢が壊れて倒れるもの。
 - 二、両スキーが角をなして静止するもの。
 - 三、後スキーが前スキーの踵部の上に重つてしまふもの
- 此は後スキーの尖は山の方に踵は谷の方に来る。
- 四、三と同様であるが踵が山に残り尖が前足の踵を越して谷に出る。此の甚しいものは両足が交叉するものである。

- 五、山側に倒れるもの。
- 六、谷側に倒れるもの。

- 七、廻り過ぎて後滑りをするもの。

一は全然駄目である。テレマークポジションが悪いが人間の脚が弱いか、練習が不足かである。二は後足に体重が残る事起因するのである。全体重を前足にかけよと云ふ理由は此所にある。今一つは後スキーの内稜が立つて前スキーに従ふて廻り得られない爲である。後スキーの内稜は實に重大な問題である。此事は次項に多少論じて見度いと思つて居る。三は踏みかためられた場所では時々起る事である。一般に此失敗は其人の忠實過ぎた爲に生ずるより他はない。

ものであつて、即、体重を全然前に重ね、後足は充分ゆるやかにして居た爲、思はず大腿部の關節迄ゆるめ過ぎて生じた失敗である。硬められた所でスウイングの大半を終つた時、一寸後スキーのベントの邊が雪の凸所に引懸つた時なとは見事にスキーのテイル同志を重ねて終ふ。後足を充分自由に保つと同時にテレマークポジションの時の兩膝の關係を忘れぬ様に、大腿部の關節は確かに保持せねばならない。四の失敗は二のそれが一層悪化したものである。私が

殆ど、ランニングのクロロチングスタートの様に後足を前に引きつける事をテレマークポジションに於て要求したのは大に此點を考慮する故である。テレマークスウイングの場合には兎角後スキーは後に残され勝である、私の要求した姿勢では多少窮屈を感じる様に思はれるが此感を以てしても實際スウイングした時は可成り前後が離れるのである。若し初めから大きく開いたならさらに開く事大となり後足は勝手に自分の向いて居る方へ走つて終には足が交叉する態までなるのである。五は練習不足か、あまり内側に傾き過ぎた爲である。足の弱さより來る事も大いにあるが少の場合には杖が助けて呉れる事がある。六は急に廻つたか足が弱いか起因する。クリスチアニアでは此の倒れ方は少いがテレマークにはよくある。殊に練習が稍進んだ時に多く、疲れた時にも多い。此點より論じてテレマークスウイングに一大警鐘を亂打したが後述するツアルン氏、バル

プラン氏のフロツテル、テレマルクシユングである。此場合杖を谷側に突いて助けやうとする事は危険である。七は大抵の人の必ず一度は經る時代であつて、此時期を頑張り通せば人並になる時が来る。原因はあまり長く前踵に力を入れたのであつて此の加減は全く練習によつて暗示を得るより他はない。

四 ダウンヒルテレマーク

スウイング中ダウンヒルクリスチアニアが一番やり憎い、と或る人は云つた。或は然りであらう。然しテレマークのダウンヒルとなると思つたよりやり易いものである。まして傾斜の適度な、雪の良い場所では一通りアップヒルの出来る人は何の苦もなく出来る。アップヒルの場合は内側に体を傾ける度が過ぎるに内側に倒れるがダウンヒルの場合は少くも初めは思ひ切つて谷側即ち此の場合の内側へ体を傾けて良い。

方法はアップヒルは大差は無い。只特に強く前スキー即ち山スキーのエツヂを立てる事である。そして爪先を充分内側に入れる心持でやる。此はアップヒルの場合の爪先を上にする心持で行ふと一寸違ふ。此は廻轉を早からしめる場合に特に必要な事である。そして体が斜面の全く下方に向いた時初めてアップヒルと同様前足踵を下に押し下け

るのである。

ダウンヒルテレマークの特に著しい、特に注意すべき失敗はアップヒルに於て述べた失敗「四」の場合である。特に此は小廻りにスウィングしやうとした時、傾斜の急な時雪の深い時に於てである。此は前述した通り、後スキーの内エッジが立ちすぎる事に主因をおき、次は体重の後脚に残る事によるのである。

一寸前にも書いたが此の後スキーのエッジングに就て少し考へて見たいと思ふ。従来は一向此點に就て考へて居ないのは不思議な位である。前足の内エッジを立てる事には誰も異存は無いが後足の内エッジを立てるに甚だ問題になる。アップヒルの時は餘り考慮する時は少い。テレマークボジションの両膝をなる可く其儘に保ちながらスウィングしやうとする時は多少後足の膝を内側におさへる様な心持になる。するに兎角後スキーも内側にエッジを立て出して来る。此がアップヒルの場合は内側にスキーが傾いてもスロープの傾斜角の方が後スキーの傾斜角(横軸)のより大であつたら後スキーは外エッジが立つ事になる。然るにもスウィングする所が平地であつたら、一寸でも後スキーが内側に傾いたら直に内エッジが立つ事になる。ましてダウンヒルの初期は全く後スキーのエッジは内側しか立たない。然しもし此場合無理にも内エッジの立つ度を減じやうとさせるに膝の姿勢は全く崩れて終ふ。後膝は外側に、はみ出

して来る。丁度尻ツピリ腰の様になる。實際困難な問題である。何處迄もテレマーク膝の型を變じてはならない。此

場合取る可き良法は二つしかない。一つは充分体重を前脚に委ねて後スキーが樂々と前スキーのスウィングについて来る様に計る事、二は後足膝は押し乍らも後足首を内側に捻つて足裏が内側に傾けて出す様に努力する事である。此は實にデリケートな事であつて、中々困難な術である。ダウンヒルの後は特に又、兩足の前後距離が大にならない様に心掛けねばならない。

扱、ダウンヒルテレマークの實際的限界は如何であらうか。雪の稍々深く乾燥して居て、底雪が氷結又は波状を呈さない處の而も高山の中腹の様な一種の恐怖を感ぜしめない斜面でならば如何に急斜面であつても容易にスウィングし得られる。而も、急な程早く小さく廻る事が出来る。此はクリスチニア大に異なる特色である。クリスチニアは急な斜面ではテレマークの様に容易に廻り得られない。

五 テレマークスラローム

スラロームとは曲線の事だ相である。要するにテレマークを連續する弧形滑走である。

此は兩方に完全にダウンヒルテレマークが行ひ得る様になつて初めて企て得るものである。アップヒルにしるダウ



るた見りよئلホルウツフ
ウラフゲンユ、ーガイエ、ヒンヨミ
りな君恒有横は物人(りよ左)
ホツヨタツマリよトラゲルネルダ
影撮徹村坂

ンヒルにしろ、廻りきつて止る迄にスウィングモーションを打止めたなら其儘廻つた方向に進行を續けるは無論であるが、ある適度迄練習すれば、何の努力もなしに自然に体が浮き上つてノーマルポジションに歸り得る事が出来る。

此はスウィングの初には態々体を意識によつてテレマークポジションに變へるが終りにはスウィングによつて速力が減じて来る。即ちスキーの低抗で体の下部程速力が減じ、上部は従来の慣性で速力が下体より大である爲前進する度が大になる。爲に自然膝が延びてノーマルポジションに歸るのである。此證據に若しダウンヒルを行つて斜滑降から直滑降に移つた時は膝の延びる事は愚、一時は体重はうんと後足にかゝつて下手すると後に倒れる事がある。

スラーロームは自然、此の膝の延びる事を利用して、前出脚を交互に變へてダウンヒルを連續するのである。無論交互のスウィングの間に或る長さの斜滑降を入れることは隨意である。杖を此際使用する事は悪くは無いが、技術上から云へば杖は持つとも使用せないが良い。スウィング本来の意義から云へば何れの場合でも杖を立てる事は悪い。

アップヒル、ダウンヒル何れでも然りであるが、スラーロームの時は特に手を態々振る事は悪いと思ふ。手は自然のままでありたい。もし自然に振られて来れば其れで良い。然し、テレマークスウィングの時手を特に上げたり擴げたりする型があるが何だか輕薄な感がする。

悠々と右に廻り左に轉じて行く時の氣持は全く筆には表現出来ないと思ふ。

六 テレマークスウィングのトレース

テレマークスウィングの條痕は其の廻轉の度によつて大差がある。雪の深い時、殊に多少濕つて居る時は中頃がやや太い弧形を呈する。然し雪が良いと三角形に近い形を作る。そして此はクリスチアニアのトレースと相似たものになるが、一般にテレマークはトレースの外側即スキーのテイルで作られた方はクリスチアニアの時より丸味を帯びる。殊に後スキーの前スキーへの從ひ方が完全である時に此事は著しい。クリスチアニアか三直線で作つた三角形の如きトレースを作ると極言するなら、テレマークは三弧線で作つた三邊形のトレースをなす云へよ。

七 テレマークステムミング

後膝をスキーの上ののせて、前足の尖を内側に曲けて前スキーで制動する方法である。前足に体重を多くかければそれだけ速度がゆるむ道理である。一般に杖は使用せないテレマークステムミングをせねば下れぬ様な幅のせまいスロープなら、かゝる力を不均等に使つて足を疲らす真似

はせずとも横滑、半横滑、全制動、半制動等によつてより以上能率の高い方法を取り得られる、又スキーフィールドで遊ぶには餘り無趣味である。

前足に体重を委ねるクリスチアニアの兩足の間隔を極度に開いてスウィングすれば丁度テレマークの型で外側にまわると同じ事になるし、クリスチアニアと同じ姿勢で後足の側へ廻る事も出来る。此等は只スキーが体の自由になつたなら何の苦もない事である。テレマークステムミングも此と同様、スキーさへ使いこなせば何でもない事である別にスキー術としては權威ある部分では無い。

或人は杖を急な谷に落した時は如何に云ふかも知れない然しかゝる時にテレマークステムで下に杖を拾ひに行ける人なら横滑りでも充分降り得られる。又杖を落して無杖で拾ひに行くに危険な様な所へ單獨で出かける事はスキー登山として許されてない。同行者の杖を一時借りて取りに降りる方が利巧な遣り方である。

八 フロツテルテレマーク

Der Skilhrer Von Zarn u. Barblam (1920) は實に驚く可き記載がしてある。此書を得たのが今春であつた爲、全く實驗に基く批評は出来ないが、此が事實であるならばテレマーク界は大革命が行はれる。理論としては正しいかも知れない。今は唯雪が来て其の實際的可否を研究するのを待つば

かりである。其の大体を左に譯出する。

過つた助言——しばしば前スキーに体重を委ねると云ふ事は不正な説明と理論とを齎らす事がある。『前スキー』の上に上体を充分傾けよ。前脚は深く後脚は軽く曲げよ——は今迄に述べられた所である。

此助言は良い状態の時にはスウィングする事が常に可能である。深い雪の時、急な傾斜の時加之、急速滑走の時には外方にしばしば投げ出される結果になるだらふ。

此諺見的な助言は恐らくは前スキーの荷重は唯体を思ひ切つて前に傾ける事によつてのみなし得られると云ふ憶説に原因して居ると思ふ。前スキーが變化する迄は、上体を僅か前に傾けて居つて全く滑降姿勢を保ち得られる。然しスウィングの爲の前スキーのステムミングが初

まると同時に、姿勢と体重の保持の條件が變つて来る。上体は此時後方にかゝり、兩スキーの角をなして居る姿勢によつて直接にステムミングをして居る處の前スキーの制動作用によつて、後にかゝつて居る体の重力は全くエツデングして居る前スキーの上に落ちる。

そして同氏等は此をフロツテルテレマルクシユブング (Klotter Telamarkschwung) 云つて居る。

兎も角かゝる新説のある事を紹介するに止めて置く。來るシーズンの最中に此の稿も補訂を加へねばならないかも知れない事を附言して置く。

阿寒のこころいも

館 脇 操



樹冠を見上げるこ、秋の深い影が光る。今日此頃、静かな夜などに、アルバムをくりかへしてゐれば、阿寒の姿が心に生きてくる。

阿寒道。ルベシベの驛遞から四里の道は何人にとつてもかなりになつかしい道だらふ。うすぐらい針葉樹と闊葉樹の林。人の丈よりも高いフキの純群落。森の朽木にしめつほく香るタモギ。カタンゴトンと静寂な中のひびきに相應しい阿寒川の流木。

一里もゆるい傾斜をのほり、一步園牧場をすぎれば七曲りも近い。高原的色彩をおびた景観は、こゝいらから漸く展開される。丸味をおびたスロープの所々にはチシマセンブリが可愛いくさてる。

クエルカスの明るい林も忘れられない。ルベシベ迄、折々見うけてきた草原の牧場にあるこそれは異なり山らしい気分がするの、またこなくうれしい。

クエルカスの林をぬけ、小灌木の間をとり再び草原に出れば、阿寒の湖は北に當つて幽姿をしめすであらふ。湖を見出す心。そのやはらかみとよるこびは旅の日にあつての、ふかい思ひだ。小さい時、箱根の葦の湖を舊道から見やつた幼心はなほ今も私の中には生きてゐる。

路傍に咲くエゾノチマコグサは、動かすことの出きない北の山境を語る。 Mountain - evulsting こいはれるこの草は、曲線的な草原美に一つの詩を添へてゐる。

湖畔を西に添ひ十町も行くと阿寒温泉がある。アイヌの吸ふ煙草のけむりが、午後の大氣にゆつたりこした輪を描いて行く。悠長な気分になつて、阿寒を享樂するには、こゝで一端旅装をとくが好い。御樂毛から十七里、これも野澤迄十里餘はトロがある。道も面倒でない。山こしては相當の道だ。樂な二日の行程。

阿寒湖、それは今ではあまりに多く人に知られすぎてゐる名だ。しかし湖の位置のため、やはり物好きな連中が行くにとどまつてゐる。

阿寒の美は森林と山岳にある。雄阿寒よりの森林は殊に見事で、原生林の幽香は、たまらない感激を、胸に與へるだらふ。純な野性のよろこび。北國の森林美は、かうした山中の針葉樹林にほんこうに生きてゐるのだ。あのさびしみとふかみはこも南國では味へない。北岸は民有林とやらで、伐木のため針葉樹の減少を見てゐるけれども、豊富な樹林は阿寒の調和を破壊するまでには荒らされてゐない。

山は何こいつても雄阿寒が好い。心がびのびの碧空におぎつて行く線で描いた様なスカイライン。朝夕湖に抱擁

させるその影。丸木舟こいふ雅味にとんだものが、一層すべてのものを生き生きさせる。阿寒富士は雌阿寒前山にさへぎられて仰けないが、フツプシと共に西岸の園をなしてゐる。

阿寒湖は周圍七里といはれてゐる。そして湖上に四つの島を浮べてゐる。セイニタイモシリ、チエリイモシリ、オンネモシリ、ボンモシリがこれである。いづれも愛らしい小さな島で、オンネモシリが一番大きい。四つの島はトドマツ、エヅマツ、チンコを始めとしケヤマハンノキ、ニレ、チガラバナ、シナノキ、シウリ、シラカンバ等の針葉樹をのせてゐる。

湖の南部には瀧の口の景勝がある。一丈餘もあるシャクナゲが、靜かに眞晝の夢をつけるのは何こもいへぬ雅致だこゝから下つた水は阿寒川となり、二十餘里の迂回をもつて釧路川にそそぐ。湖畔の夜話、爐端で、流送の人達にこの川筋の話聞くのは、たのしいことの一つだ。

阿寒で忘れてならないのは、ヒメマスマリモだ。十和田や支笏にそちこちに養殖されてゐるヒメマスはみんなこゝを故里にしてゐる。アイヌが漁したこのさしみは、ウグヒのヌタと共に山中での珍味である。ガスの青い光をうけたギヤマンの中に、丸いマリモを通してみた人は、阿寒を幻想するだらふ。マリモは北岸に近い一尋乃至二尋の水底に秘められてゐる。本種は形態の奇觀と相待ち、阿寒の珍種

として名をうたはれてゐるものだ。

湖はきこもそうだが、雲の變化に伴ふ水面の變化の偉觀は、殊更山中の湖畔で、痛切に味はされる。

あの色彩。あの調和。殊にあげがたとたそがれ。光線の微妙な働きに、いつの日もいつの日も心は酔はされてゐた。月の夜も好い。黙つたまゝアイヌの横顔をみてゐると、ひとりでに涙が湧いてくる。エゾ、トドマツの樹肌の流れる青白い光には、永遠の死をおもはされる。舟をボンモシリ一のあたりにこぎ出して雄阿寒のかけをもとめ、山に無言の語をしては、月明に無限といふ言葉の力を知る。

雄阿寒と雌阿寒は阿寒の二名峯である。雄阿寒のもの凄く見える森林は、それが一日行程にあるにせよ、ひどく行程をはばんで、登山者は今迄に十指を屈する位のものである。雌阿寒はのほり好い。そして多くの人は雌阿寒に遊ぶ。工藤氏によれば、植物も雄阿寒と大差がないといふ。その上、雌阿寒の展望は北海有数のものであり、且又植物群落との火山型は、樽前、駒ヶ岳と共に挙げざるを得ない所である。

雌阿寒への道は、一步園牧場よりと、今一つは湖畔からである。二つの道は、前山の喬木林帯がつきた所で一諸になつてゐる。

朝霧は深い、湖は霧にむせんで、肌ざはりの冷い風がすうい〜と来る。山へ行くんだ。何となくうれしいひきしまつた氣になる。たこへそこが險峻な山でないしろ、たとへそこに残雪が光つてゐるまいか。

「熊があるよ」 アイヌのおやぢの言葉を後にして宿を出る。湖畔より北見への道を僅かに進み、一溪を渡り三角點に達する。既に湖に入る前原野帯及び潤葉喬木樹林を見終つた私達はやがて針葉樹林に入らなければならぬ。

廢屋を右下にして一溪を渡り、針葉樹のしげみにその森林帯から仰いだ前山の赤肌は山さいふ感じを鮮明にあらはしてゐる。

道は好い。そして傾斜も恰好だ。その上朝の大氣は瑠璃色にすんで、森の命をだきしめてゐる。やがて二つに道が別れる。山に對して右をとり、よい方をすてなければならぬ。往々人は左は惑ひこむこいふが、うなづかれる所がある。

道はせばまる。森は一層のくらさをましてくる。しばしの間、尾根にたどりつくまで蔭鬱な中を歩まなければならぬ。酸化鐵の作用に依ると思はれる赤い小さな川を渡れば、既に風不死岳は後にまはり、前山東下の森林帯に出る單純な山腹を水無き溪谷に縫ひ、ネムロト下の純林に出る蒼い銀色の溪に陽がうすらすにさす。

「やつぱり針葉樹だ」腹の底からひびいてくる。

やがてに尾根へ。眼界は開けた。やゝ右に雄阿寒を眺めつゝ、左にはゆるやかに傾斜した小丘がつづく。ミネヤナギ、ガンカウラン、イツツ、ヂ等があらはれて高山の景觀は將に展開されやうとしてゐる。

尾根を行きつゝ、植物大觀に注意をすれば、何人の眼にも痛い程の印象を残すは北見、根室、釧路の國境を蔽ふ森林である。試みに雄阿寒の一方へかけて、國境の峯をみれば雄大な森林美に讚觀の聲を發せざるを得まい。

小細工なものはやめる。うんこ大きくなるんだ。山は言ふ。そしてそれはたしかなほんごうなこごだ。

前山の南側を行く。廢屋（硫黄採掘のあこ）のまはりに、メアカンキンバイが、盛んに咲いてゐた。道を雌阿寒に急げば、タルマヘサウ、チシマニンジン、イハギキョウが岩石のもとに開花してゐる。ハイマツはかなりにつづく硫氣孔も近い頃、コマクサか南斜面にかけて一面に咲いてゐた。忘れ兼ねる山の味よ。「久しぶりだね、駒草」と笑ひながら、話しかけたい氣分になる。

硫氣孔へ。火山型はあらはれ出した。タルマヘサウの美は、北海道火山砂礫中いづこにも普通に見るこごを得るがいつもながらに美しい花だ。

雌阿寒の美は荒廢の美である。壯麗よりも荒廢の方がどれ程私達に強く生きるのだから。メアカンフスマの大純群落も、この荒廢と相待つて、本山の壯觀をつくつてゐる。

高山植物の濕原に於ける美と、高山植物の岩石中に於ける美とは共に二大美觀であるこごは何人も知つてゐるやう。硫氣孔はかなりの勢をもつてゐた。しかし、それも今滅びやうとする前後の呼吸であるとも思はれる。阿寒火山の最後の呼吸。私の大山の死を懐ふ時、淋しいなつかしい詩は私の涙をさそひながらも私の心に生きた。

硫氣孔に別れをつけて一峯へのほる。午後の降に極光色の雲をうけて永へをものがたる中央高地の姿は、忘れ得ぬ山の愛、そのものの姿であつた。オコツクの海が、太平洋の海が。アトサヌプリ、斜里岳。地圖を前にひろげて、次から次へ山の名をたづね、湖を見出して行く。絶好の眺望日好り。

のほりにくい尾根を更にすゝむ。ガンカウラン、ミネズワウ、チシマイハタデ、イハウメ、シラタマノキ、コケモモは所々に私達の身をやはらかく接待した。遂にのほりきる。アヲ沼、アカ沼を前景に阿寒富士が、心をわくわくさせる。しばし、火に壁や、まはりの地形の觀察に眼をやる。三時。山を下る頃には筈とも何ともつかぬものがちよつと降り出した。尾根から尾根を。小さいながら、まごかの縦走でもしてゐる氣がする。「冬きたいな。雪はかたいだらふが」まはりのスロープを見て友達はうつこりとしてゐる。

ひたすら下る。湖畔へといふさゝやかな棒杭を見て、再

ループス

❶スキーの色を黒にしたら、さば誰も一寸考へて見る。なるほどいゝ。霧や月夜の滑走には雪との鮮明なコントラストで傾斜の度合などの判定は便である。而し、暖かい日には熱をより多く吸収する爲に雪を附着し易い。また製品購入に際しては黒色のスキーはその材の木目が解り難い爲に、良否の判定に苦むわけである。

好みから云つても、最近、埃國から輸入せられた MIZZI LANGER-KAUBA 製、ビルゲリー式の見ても、その臺木が黒色に塗られてある爲に、輕快と云ふ感じを打ち消してしまつてゐる。

び森のネマガリに。そして林道を、針葉樹に名残をとどめた最後の夕陽の線は、私達の登山を祝福したかの様に、華かな明を與へてゐた。うるほみの中を唯、湖へ。

夜は來やうとしてゐる。森のしげみを通して湖岸の空は燃じてゐる。ネマガリがヤブに、唯一人年頃のメノコが、タケノコこつてゐた。可憐な講だ。メノコは足音にしばし手を休めて、空を仰いだ。旅人は夕闇をだんまりに下る。湖がみゆる。私達は歸つたのだ。オリイヅ色の夜の空気が、鋤路の奥をすつかりつゝんでゐた。アイヌの親爺は「お歸り」ミニッコリ笑ひ、させるをくはへて去つた。

阿寒を訪れたら、よろしくパンケ、ペンケも訪れるが好い。パンケトーから仰ぐ雄阿寒の味にはまた格別なものがあつた。林相も更に正しい。湖面も好い。途中でウグヒをこれば、わけなくとれるから旅の日の興に添へるも面白いだらふ。歸り舌辛邊へとまり、タコや棒頭、さては周旋屋あ

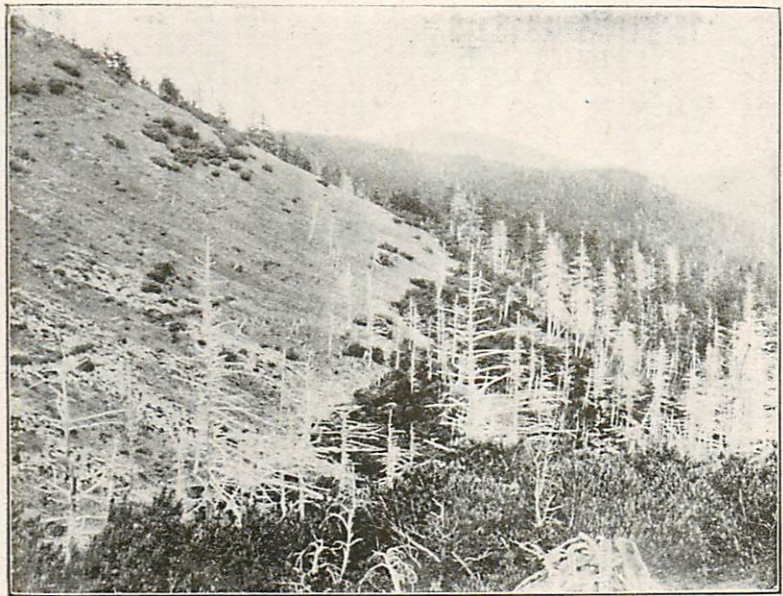
たりの凄い話もためにならふ。

北見峠。屈斜路、摩周。名だけきいてもぞく／＼する様な所が澤山にまはりがある。

最後に考慮すべきは鋤網線の開通である。この實現が思はれる今日、阿寒の繁榮は眼に見えてゐるが、同時に破懷がすべてに先立つて杞憂される。幸に阿寒湖畔の森林とマリモは當局のみとむる所なり。近く天然記念物として、保存されることになつてゐる。

阿寒の名は愈々高くなる。大沼と相待つて、南北の二天勝地は天然の姿をもつて、けちくさい小細工のものを超越しながら、天下の人士に接することと思ふ。加ふるに大沼がやゝ臭味をおびだしてきた今日、阿寒を、まだ手をつけぬ阿寒を見出し得たのは吾人これを祝福せざるを得ない。

嘔吐を催したくなるいやらしいペンキ塗の洋館がない代りにいつまでも純朴なアイヌをして丸木船に呑氣に乗させてゐたいものだ。



阿寒岳八合目附近 栃内吉彦撮影

究研のプムヤジーキス

スキージヤムピング概説

廣 田 戸 七 郎

草むらに集鳴く虫の音も、次第に淡らいで、向ふ野山の草木も紅葉してくるに、秋は悲しい。といふ感じがしみじみと味はれます。

全く反動的に僕等の様な人間には、あの豪壯な直滑降や、優しい曲線美を畫いて行くスラロームや、スキーの極致とも云ひ得るスキージヤムピングの楽しさが胸一ぱいに溢るるのを禁ずることが出来ないのです。

あゝ雪はもうぢきに降るんだ。

全く雪に埋められて、スキーの愉快さを嘗めることの出来ぬ人は氣の毒でならぬ。

スキーもさうやら國際的運動の一つとして、活躍の天地が開けて来たやうであるが、我が國にも彼のスキーの王國瑞典、諾威と全く雪質状態を同じうする、北海道の地あることを誇りとして、且つ十分に楽しみたい。特に内地の熱心家に来道をおすすめしたい。

さてスキー術の極致蓋奥とも云ふべきものは何といつても、スキージヤムピングであらう。我が國のスキー界が如何に擴大し盛んになつても、この壯快無比なスキージヤムピングが注目されぬ内は決して誇るに足らぬと思はれる。

吾々がスキーを穿いて滑降中に、一寸した凹凸のある面で衝動を受けて、スキーの浮き上ることを経験することがあるが、この僅かの浮き上りが抑々今日のスキージヤムピング

にチャンスと興へたのであるらしい。

つまり斯うした浮き上りに趣味をもつた人が、痛快味を加えて物好きな考へを起して、もう少し長く空中に居たら尙面白かるふに云ふ慾心を起して、いろいろ工夫して今日の様な大々的のジヤムピングを行ふ様になつたのらしい。

實際僅かの浮き上りにさへ愉快を感じる位なもの、まして、眞面目に緊張して、悠々二、三十米突も飛ぼうものなら、誰だつて病みつくのは當り前のことだ。慥かにジヤムピングは餘興的なスポーツにあらずして、趨くところは眞剣な競技であらうと思はれる。

少く共ジヤムピングをやろふとする人は、ジヤムピングがスキーイングの極致である丈に、スキー術の凡てを含んで居ることを考へて最も慎重に、大膽に、細密に、思慮深く力をこめて、そしてしかも体の平均を失はぬ様にして飛躍せねばならない。少しでも油断があつたら、とんでもないことの起るのは火を見るよりも明かなことで、少しでも運動に理解のある人の普く知るところと思ふ。

さて私はスキージヤムピングについては未だ三才の童兒と云ふべきであります。今までの経験と研究とから甚だ僣越乍ら、スキージヤムピングのほんのアウトラインを書いて見ます。尙精細な各部分的の研究は何れ各自お互が發表し會ひ度ひと思ひます。

現今のジヤムピング用斜面の構造は飛躍を最も長い距離

行つてジヤムバアが着陸に際して出来る丈足にシヨックを受けない様に作るのですが、なかなかさう理想的なものとは作れるものではないと思はれます。

まあ飛臺ジャンプの上部斜面の傾斜は二十度前後で約五十米突位の距離があつたらよからうと思はれる。それから飛臺の下部斜面の傾斜は二十五度から三十度位が適當と思はれる。斜面の距離は上部より長く六十米乃至七十米突あつたら結構でせふ。

それから飛臺の付け方は飛臺の急斜な部分が少くとも最長飛躍距離よりも五間以上長い様に作らねばならない。で若し急斜部がそれより短いならば飛臺をもつて後ろに作るがよいでせふ。

飛臺丈の角度の付け方は、飛臺の長さが一間半から二間半位まであつたら、夫を五度から七度位までにしたらよいと思ふ。全く傾斜のない飛臺は着陸の衝動を大にするのみと思はれます。

さて今スタートに立つて滑り出すならば必ず何處いらでどういふ姿勢に移つて、さういふ工合に飛臺を離れてどう云ふ風に手を振るさかといふ様な事等を、よく考へて大なる決斷力を以て滑り出すんです。そして一端滑り出したら決して弱い心を出しては駄目です。餘程姿勢のくづれぬ限りは、どうしても飛揚するつもりで滑走を續けて飛臺の端から六間位のところから屈身姿勢クラムピングに移るんです。

屈身姿勢といふのは、先づ兩足を一足に揃へて、膝を密着して屈け上体は前に屈し、手の握を足の踝のところにつく位にし、体重は足裏の中央に來る様にするんです。そして丁度臺の先から一間半位のところになつて、急に体を起して軽く前方に傾け、倒れる様にして前かがみの姿勢となる。体重は此場合踵に入れたまゝ臺を踏み切つて臺を離れる。この場合力を爪先に入れて、踵があくと餘り体が前方に屈み過ぎて前方にのめる恐れがあります。爲に体の平均を失ふことが多い様です。此は殊に小さい飛臺で練習して居て、痛切に感ぜられることです。

空中に滑り出た時は、膝をしつかりつけて、兩足を成る可く一足に揃えて、体を前方にかけ、斜面に着く時に斜面と体とは直角なる様に保つ、そして手を前方から後方へなり、後方から前方に振ることは、最も大切のことでありと思ひます。體かにこの事は重要なことです。手の振り方は人の癖にもよる様ですが、飛んだ時に体の姿勢の崩れ具合で、それを取直さうとするために、反作用的に働くことは事實らしいです。

さて飛躍を終つて着陸する時には空中の姿勢から足先を密着して相當下向きとし、スキーの全面を同時に雪面上に觸れる様にして着陸して足底が地についた感すると同時に直ぐに、テレマークの姿勢に移るのですが、このテレマーク姿勢によつて如何に体の受ける反動が減せられるかは事實らしいです。

経験のない人には判らぬことです。其後体が安定になつたら直滑降をやつて、適當な所でテレマークなりクリスチャンアで止めるのです。

此處迄完全にやり得た時の愉快さ、喜ばしさは之も経験の無い人には判らぬことです。まあこれがスキージャムピングであります。全くこの説明は前述の通りほんの概略で全く直滑降の様な書き方で、不備な點、不明な點も多々あることと思ひますが、何れ足らぬところ不明なところは今後シーズンに入つてからゆつくり考察してお互に進み度いと思ひます。

スキージャムピングで忘れてならぬことは、斜面の踏み堅め、スキーへの塗蠟を十分にすることであると思ひます。それから使用すべきスキーの式は現今に於ては諸威式が最適であると思ひます。

奧國式はスプリングが切れたりして危険がともなふことがあります。又實際前者を使用したら後者を使用する氣にはなりません。

材は長さも相當長く、重みも相當ないと着陸した時に体の重みの割合に掛る足部が屈曲して、飛揚者を前に倒す恐れがあります。木目は楕目より板目の方が勿論宜しいです。ステッキの不用は言ふまでもないことです。服装は最も輕快を尊びます。ジャムピングが華美なスポーツである丈飛手も輕快な、見ても氣持のよい服装をして居るこ

が必要だらうと思ひます。先づ上部は夏シャツを下に着てその上に毛糸のヂャケット(頭からすほり被つて着るもの)を着たらよからうと思はれます。スウエーターは不向きです。ズボンは普通のスキー用ズボン(乗馬用式の)でゲートルより長い靴足袋を穿いた方がよいです。

最後に簡單な練習法を一書きます。

初はスキーを穿かないで「屈身法」「踏切」「空中姿勢」特に腕の回轉及着陸の練習をするのがよいでせう。それからスキーを穿いて臺に向はずに練習し、滑降中にこの姿勢を練習して安定に反射運動的に自由になつたら、初めて低い極く小さい臺を作つて練習し漸時高いものを作り斜面も急なところを選んでやる様にし、若し高い臺を飛び得る人も姿勢が崩れた時は、低い臺で練習したらよいでせう。斯うした練習法は殊に手ぬるい様ですが、この階梯を踏んで確實な練習をやつて初めて妙域を極め得るのではないかと思はれます。又割合に危険を免れ得るのではないかと思はれます。

本當に僕等は一時的な冒險的の不確實な練習に陥らずに確實なる練習に、實を擧げたものであります。終りに私は本邦スキー界のジャムピングの妙域を極めんとする人の自重を祈り併せて世界的ジャムピアの輩出せんことを祈念するものであります。(一九二二一〇六)

スキージャムピングに必要な術語

日本語	英語	獨逸語
飛躍法	Jumping	Sprung
出發	Starting	Abreise
駆け出し	Approach	Anlauf
屈身姿勢	Crouchdown	Neigung
踏み切り	* Sats	Apsprung
飛臺	Take-of	Schanze
飛揚	Flight	Flug
着陸	Landing(or. Landen)	Aufsprung(od. Aufkommen)
着陸地	Alighting-ground	Aufsprung-bahn
	Out-run	Auslauf
飛躍用斜面	Jumping-hill	Sprung-huegel

* ノルウェー語



本邦に於けるスキーの団体

照會事項

- 一、加入會員數及性質。
- 二、組織。支部の有無。
- 三、設立年月。
- 四、事業。刊行物の有無。
- 五、事務所。(事務所にあらざるも會團の中心となり照會通信をなし得る宛名)
- 六、首腦者。
- 七、會員の主なる滑走地。
- 八、主なる研究事項。技術上の傾向。
- 九、會員の有する記録。

A. 飛躍(距離、年月、姓名)

B. 長距離滑走(同上)

C. 登山(山名、標高、登山回数)
到着順掲載

三菱俱樂部美唄支部 スキー部

- 一、七十名。
- 二、三菱鑛業株式會社美唄鑛業所役員。
- 三、大正八年一月。
- 四、五百燭光の電燈を點じて夜間練習を行ふ。毎年一回大會を開く。
- 五、北海道空知郡沼貝村字美唄。三菱美唄鑛業所内。

六、監督、白鳥恒雄。主將、佐藤道太郎。

七、スキーヶ丘(二〇〇M) 番町ヶ丘(二〇〇M) 熊のグ
ラウンド(五二九M) 唐松山(五八六M) 三笠山(五
九四M)

八、平地滑走とジヤムプ。

九、A. 四〇尺 十年二月 佐藤道太郎。

C. 蝦夷富士一八九三M(但一二〇〇Mまで) 一回

十勝岳 一八一二M(但七〇〇Mまで) 一回

サホロ岳一四三三M 二回

イルムケツツ 八六四M 一回

沖里河山 八〇二M 一回

第四高等學校 旅行部

- 一、第四高等學校生徒及び教授 凡そ百七十名。
- 二、旅行部は山岳部とスキー部とを合して一つの部として
學友會の一部をなす。
- 三、大正十年四月。但し以前は陸上競技部の内に含まれた
り。
- 四、刊行物なし。
- 五、金澤市 第四高等學校 旅行部
- 六、旅行部長 福井玉夫
委員長 島野彰 外委員八名
- 七、金澤市東南郊外 野田山。戸室山。醫王山。
冬期及び春期休暇には越後妙高山麓、關山、關温泉に

て合宿練習を行ふ。

八、内地の雪故、輕妙なる技術には適せず。加之山岳部の
人々が中心なる爲自然、登山の方に傾く。

九、由來四高旅行部は冬期登山につきては、日本山岳界の
權威なりしが、近くスキー登山につきては必ず立派な
る記録を残すに到るべし。

小千谷中學校内 北辰會スキー部

- 一、本校生徒 各學年約二百名
- 二、本校北辰會規定に依る。
- 三、大正二年十二月
- 四、体育を目的とす。刊行物なし。
- 五、本校内
- 七、本校附近

東京帝國大學工學部T友會 旅行部

- 一、T友會有志 凡そ二十名
- 三、大正八年九月
- 五、東京帝國大學工學部事務所内
- 六、瀨川敏彦、豊田忠夫、廣澤真吾、大岡忠徳
- 七、越後關温泉及び赤倉温泉

柏崎中學校 スキー部

- 一、六七十名(生徒)
- 二、會自の投票に依り二名の役員を人選し當部一切の事務

- を委任し一定の會費を徵集し會有スキーの修繕及び新調等をなす。
- 三、大正六年十二月
- 四、毎年二月上旬に數組に分ちてスキー行軍を行ひ技術の進歩を測る。
- 刊行物としては年に一回宛スキー雜誌として技術上の事を記したるものを會員に興ふ。
- 五、新潟縣立柏崎中學校 スキー部
- 六、顧問・古川鐵平。北島喜助。高橋中尉。役員、安澤一雄。瀧澤俊夫。
- 七、學校附近高地。
- 學校より約二哩の處に位置したる砂山。(日本最大の砂丘にしてその距離一千有餘米に及ぶ好適の練習地なり)
- 八、スキー及器具の改良
- 近來はアルペンスキー術よりも豪壯輕快なるノルウェー式スキー術に依り麗麗優美なる演技的練習盛なり。
- 九、A. 十七呎二吋 九年三月 瀧澤俊夫
B. 五千M 九年二月 安澤一雄
- 草津スキー俱樂部**
- 一、五十三名、草津町青年有志
- 二、スキー運動普及の爲め總て會費を徵集せず。費用は特志による。
- 三、大正三年春

- 四、交通の補助。登山案内等。
- 五、群馬縣 草津溫泉場
- 七、草津附近
- 八、登山、交通の研究。
- 技術としては年々進歩の傾向あり。尙参考として當地小學生徒の平均身長が年々増加しつつある事を小學校統計に示さる。
- 八、A. 五十尺。十年二月 會員中島武太郎
B. 四里 九年一月 幹事 中澤助
C. 白根山(二二四二M) 元白根山(二二〇〇M)
- 東京スキー俱樂部**
- 一、百五十名。官公吏、會社員、軍人、學生等各階級を含む。
- 三、大正三年一月。
- 四、シーズンの間雜誌「ツーリスト」を機關雜誌に代用。
- 五、東京驛内ジャパン、ツーリスト、ビュロー内
- 六、幹事。外山高一。男爵稻田昌植
- 七、越後の各スキー地並に五色溫泉附近
- 八、九、會員個々の自由研究を主とし居れば俱樂部としては記録を有せず。
- 高田師範學校 スキー俱樂部**
- 一、約廿名。生徒。
- 三、大正九年

- 五、新潟縣高田師範學校寄宿舎
- 六、部長 佐々木大尉 幹事 三名。
- 七、紀念砲臺(學校附近の小丘) 金谷山練習場。南波山山麓(毎年大會の競走地)
- 妙高山山麓(赤倉練習場。田口練習場)
- 八、研究事項なし。
- 九、記録不明。

◆本稿資料蒐集に就て

本邦に於ける各種スキー會團俱樂部及び各學校スキー部にして、本會より照會致しましたに就て未だ御返報を給はらざるもの、並に本會の不行届の爲め照會を發送し、御教示を御願し得なかつた會團各位は、吾々の此の小きな企てに對し御賛同下さるならば何卒前記各項について早速御一報を與へられん事を切に御願ひ申上ます。

尙、本會の需めに應じ早速御丁寧なる御返報を致し送り下さつた各位に對し改めて深き感謝を捧げます。未載の分は次號に掲載致します。



告 會

スキー旅行家に
本州方面のスキー家にして本シーズン、北海道方面にスキー滑走をなさんとせらるる人にして目的地事情の不明な點がありましたら本會へ御照會下さい。喜んで旅程調査其他の北海道スキー旅行に必要な事項に就て出来るだけ御便宜を計ります。勿論手数料など頂きません。但し御照會はなるべく十二月十五日迄に御願致します。

本誌定價の改正

本誌より定價を改正することに致しました御承知の通り此は營利的の刊行物ではありませんから、値上により敢て不當な利潤を生まうとするのではないであります。此の事業の將來を安固にして、もつゝ氣持のいゝ立派なものに仕様するのであります。また今後は毎月一回十五に發行することに改めました。

本會事務所の移轉

適當な家屋を探索中のところ、今度愈々左の處へ引越しました。従前通り毎週水曜日の晩を定例集會日と致します。
札幌區北三條西七丁目(道廳巡查教習所前)
山とスキーの會

お ね が ひ

本誌を購入して下さる全ての人々へ
再三書きました様に本誌は營利的のものではありません。また残念乍ら本誌刊行の爲に専心する者がなく、皆本務の片手間にやつてゐるのであります。ですから本誌は一切、前金か又は現金でなければ御渡しない事に致してゐます。此の事は今回から斷然實行致しますから、御購讀下さる方は此の點、惡しからず御了承下さい。

前金御拂込の人々へ

突然本誌より定價を改正することになりました既に前金を以て御拂込済の方々には本誌に限り舊定價通りの勘定を致します。即ち創刊の際、六ヶ月分(一圓廿錢)御拂込下さつた方は本誌で終りとなります。又六ヶ月分以上御拂込の方には、勝手ながら十號よりは、新規定價通り誌代を頂き度いと思ひます。従つて御申込通りの月まで御送り出さない事になります。此の點につき疑義、異義がございましたら直接申出下さる事をお願ひ致します。

原稿を與へて下さる人々へ

行を更める時は必ず一字下げること。、を明かに記し一字割として下さい。申すまでもなく文字は明かに、特に近似の字割を持つ字に御注意下さい。原稿紙は御申越次第御送り致します。

第九號目次

記事	テレマーク.....	中野誠一 (一)
	阿寒のこころ.....	館脇操 (一〇)
	スキージャムピング概説.....	廣田戸七郎 (一六)
	本邦に於けるスキーの団体.....	(一〇)
	スプールの會告.....	
圖版	ファウルホルンは見たミヨンヒ、エイガー、ユングフラウ.....	坂村徹 (七)
	ゲルネルグラトよりマツタリヨツホ.....	同 (七)
	雌阿寒岳八合目附近.....	栃内吉彦 (一四)